

氏名	石川 眞佐江
ヨミガナ	イカリ マサエ
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	博音第247号
学位授与年月日	平成26年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉 幼児の遊び場面における歌の諸相と機能

論文等審査委員

(主査)	東京藝術大学	教授	(音楽学部)	佐野 靖
(副査)	東京藝術大学	准教授	(音楽学部)	山下 薫子
(副査)	東京藝術大学	教授	(音楽学部)	杉本 和寛
(副査)	聖心女子大学	准教授	(文学部)	今川 恭子

(論文内容の要旨)

本研究の目的は、おおよそ1曲の歌をある程度正確に歌うことが可能となる幼児期(3-6歳)において、遊びの中で「楽曲としての歌をうたうこと」にはどのような機能と特徴があるのかを、幼稚園および保育所における参与観察を通して、幼児の遊び場面において歌が歌われた事例を収集し、その分析・検討を行うことにより明らかにすることである。

まず第一章において、生き物や植物などの自然環境や絵本や玩具などの児童文化財を含めて、ひろく物的環境をモノととらえ、幼児とモノの相互作用に、どのように歌が介在しているのか、検討した。幼児は環境に自ら主体的にはたらきかけることによってモノの性質や属性を理解し、自らかかわることを通じてモノを意味づけながら知識と経験とを蓄えていく。その過程において、歌を通して環境とかがわる幼児の姿を事例からとらえることができた。幼児と環境とのかかわりにおける歌の機能としては、①モノを理解する・意味づける手段となる、②モノとのかかわりを深める手段となる、③イメージを広げる手段となる、という3点を指摘した。

第二章においては、幼児と、自己を含めたひととのかかわりを中心に、そこに歌が何らかの形ではたらいた事例を検討した。歌は、歌われるその1回1回の実践の中で、幼児自身や幼児と他者との間で新たな意味をつくり出されていると言える。幼児とひととのかかわりにおける歌の機能については、①遊びの隙間を埋める、②他者とのかかわりを生成する、③場の共有を確認し、遊びと遊びをつなぐ、④身体の共振を生む、という4点を指摘した。

第三章においては、ごっこ遊び場面の事例を取り上げ、ガーヴェイの遊び理論におけるごっこ遊びの構成要素の変化に、歌がどのようにはたらいているのかについて検討した。ごっこ遊びにおいては、ひと、モノだけでなく、それらに付与されたイメージやストーリーといった、幼児の想像の世界が重要な要素となってくる。その中で、共通のイメージである歌は、複数の幼児により理解されやすく、受け入れやすいイメージの提示方法となる。ごっこ遊び場面における歌の機能については、①遊びにおける幼児同士の人間関係を変化させる、②遊びのアイディアや遊びへの幼児の参入を受け入れられやすくする、③遊びにより具体的なイメージを付与する、という3点を指摘した。

そして、幼児の遊び場面における歌の特徴として「コミュニケーション性」「シンボル性」「可変性」の3点を指摘した。

(1) 歌のコミュニケーション性

遊びの中で歌が歌われる時、発信者である歌い出した幼児の意図はどうであれ、歌われた歌をその場にいる幼児、あるいは離れた場にいる別の幼児が受け止めることで、そこに意味が生まれることがある。歌の持つ意味がそのまま両者に共有されることもあれば、受け手によって別の意味を与えられることもある。これ

は、ミードの言う有意味シンボルによるコミュニケーションのひとつの形であると考えられる。これに対し、ひとりで歌う場合、その歌はあくまでも幼児自身の中で循環する。しかし、歌が音声として発せられることにより、そこには歌う自分の発見とも呼ぶべき、自己コミュニケーションが生まれる。

(2) 歌のシンボル性

ある歌を複数の幼児が共通に知っていることで、その歌の歌詞内容やそこに含まれる状況設定が幼児全員に共有される。その歌は幼児の中に蓄積され、場面に応じてさまざまな遊びの中で引用される。そして、歌は一節のみを歌うことでも全体のシンボルとなり、容易にその全貌が全員に共有され、理解される。歌われた歌の内容や状況設定は、そのまま、他のイメージと結合されて遊びに取り入れられることもあれば、遊びの展開が変わる契機となるだけのこともあり、また歌うことそのものへと移行していくこともある。歌は部分から全体を想起させるものでもあり、また全体から部分を切り出して好きなように他のイメージと組み合わせ、利用することもできるものである。

(3) 歌の可変性

幼児が歌を覚える過程は、ほぼ「ひとの歌う歌を聴いて」覚えていくものであろう。それゆえ、歌は形をもたず、誰と、いつ、どこで歌ったかという背景によって、その都度あらたな意味を持って立ち現れてくるものである。また、歌を覚えた幼児も、今度はその歌を自分なりに、好きな時に、好きなように歌うことができる。このような、歌の実体を持たないゆえの可変性が、幼児の世界においては自由かつ有効な表現の手段として駆使される理由のひとつであると考えられる。

以上の論考を総括すると、幼児の遊び場面における歌の機能は以下の点に集約される。

1. モノを理解し、意味づけ、モノとのかかわりを深める手段となる。
2. 他者とのコミュニケーションの手段となる。
3. 自分とのコミュニケーションの手段となる。
4. イメージを広げたり、深めたりする手段となる。

幼児に歌を伝えていくことの意義としては、これまでの研究では音楽的発達の観点、既存の文化への参入という観点、他者と共に歌うことによる社会的発達という観点などが指摘されてきているが、それ以外にも、幼児の世界を広げ、モノや他者や自分とコミュニケーションする手段を増やすことにもあると言える。

(総合審査結果の要旨)

本論文は、参与観察で収集した事例の分析、解釈を通して、幼児が遊び場面において「楽曲を歌うこと」にどのような機能と特徴があるのかを明らかにしようとするものである。事例としては、計5つの幼稚園、保育園で収集されたものの中から、事例の文脈や対象幼児に関する情報を得ることができた41事例が取り上げられている。

本論文の学術的価値は、以下の3点にまとめられる。

第一に、幼児の立場に立ち、子どもの自我や存在に寄り添いながら、遊び場面の歌を文脈と密接に関連付けて論じている点である。こうした関係論的な視点は、集団性や社会性の発達、あるいは歌唱能力の発達などに重点を置いた従来の研究とは一線を画すものであり、幼児期における歌の問題を新たな視点からとらえ直す論文として高く評価できる。第二に、文脈を重視した解釈を徹底し、エピソード事例の記述において観察のみならず、ていねいな保育者への聞き取り調査も実施し、記述の実証性を担保しようとしている点である。質的なアプローチに対しては、解釈の妥当性、客観性の問題が常に取り沙汰されるが、長期にわたる取材による豊富なデータの蓄積と真摯な解釈によって、ある一定のレベルまでその信頼性を高めることができていると判断される。第三に、幼児と環境やひととのかかわり、ごっこ遊び場面における歌の機能として、モノの理解や意味づけ、イメージの拡大、場の共有、身体の共振、幼児同士の人間関係の変化などを具体的に提示したことがあげられる。

ただし、いくつかの課題も残されている。まず、先行研究の提示が羅列的で、本論文との関連性が明確に示されていない。この研究の独創性を際立たせるといふ意味からも、先行研究の示し方を吟味し直す必要が

ある。G. H. ミードの相互作用論に関しては、再検討が求められよう。また、「遊び」や「遊び場面」などの重要な概念に関する説明も不足している。さらに、解釈に至るプロセスの記述が不十分なために、解釈そのものに説得力がない場面も見受けられる。そして、本論文の最も大きな課題は、総括となる結論部分が十分に構造化されていないという点である。各章の結論が並列的に提示されている内容は、本研究の独自な問題設定や徹底した方法論に比べて物足りないと言わざるを得ない。歌の「機能」と「特徴」の関係を整理し直し、各章の結論を構造化するための理論的枠組みの構築、もしくは上位概念の導出が求められるところである。

以上のような課題は認められるが、保育学における遊び研究や幼児理解に関する研究と、音楽教育学における幼児期の音楽行動・歌唱行動に関する研究をつなぐ可能性をもつ本論文は、課程博士の学位取得に十分に値する内容であると判断し、合格とする。